



2学期が始まりました。本学期も、どうぞよろしくお願いいたします。

## よどみ、よごれ、むだ…はないほうがいいのかな？

少々時期を外した感もありますが、私の散歩コースには美しいスイレンの花が咲き誇っていました。それはそれは美しいスイレンの花でした。



ふと湖面を見ると、その美しい花には少々そぐわない美しくない湖の現実が。こんなに汚れたところに、と思わざるを得ませんでした。

そんな思いで河川の環境に関する本を読んでいたところ、やはり水の汚れ具合で住む魚類なども違ふとの情報が。読むにつれ、やまめなどがすむきれいな川がいいと思ったし、汚れが0になるように頑張らないと！と力を込めたところでした。しかし、ふとコラム欄に目を向けたところ、「きれいすぎても」という記事が目に入ってきました。そこには、こんな文章がつづられていました。

「水質が良いに越したことはありません。ただ、一番きれいと言われる純水では、生き物は決して生きられません」

なんと。生きるためには、よどみやよごれの原因と思われた微生物が不可欠である、と文章は続きます。今風に言うと、“持続可能な環境”こそが大切なのだそうです。

翻って、これは人の育ちにも言えることなのではないでしょうか。我々大人は、つい子どもたちの育ちについて、何もなければいいのになあ、とか、何かありそうならば取り除かねば、などと思いがちです。もちろん、その思いがだめだとは決して思わない。その愛情に包まれる子どもたちのなんと幸せなことか。ただ、異物完全除去という過剰な反応は、子どもたちの育ちをもしかしたら生き生きとしたものにしない可能性があるのではないか。

今年の夏は、期せずしてスポーツの世界大会がたくさん開かれました。その素晴らしい姿に、感動したのは私だけではないでしょう。そして、一流のアスリートから聞かれる言葉には、常に「努力」や「挑戦」、さらには「生き方」や「感謝」などがキーワードとして際立っていました。つまり、華やかな彼らの育ちは、決して平たんな純水のような環境ではなく、でこぼこで、乗り越えなければいけない課題がたくさんあって、それを努力して乗り越える瞬間があったり、時には理不尽な場面に涙したり。そんなよごれやよどみを乗り越えたからこそ、あの美しい姿が作り上げられたのではないかと、改めてその背景に思いを馳せたところでした。そして、そこまでの育ちには、決してむだなことはなかったのではないかと。

ひるがえって、あの美しいスイレンの花が生きている一見汚いように見えた湖、実は生き物の宝庫だったのです。一見無駄に見えるものこそ、実は大切な宝物なのかもしれませんね。

さあ、2学期が始まります。まだまだうだるような暑さが続く悪条件の中の始まりになりました。見学旅行や修学旅行、学習発表会や日々の授業など、たくさんの出来事が待っています。悩みや葛藤や、友達関係などに憤ることもあるやと思いますが、これも、また、大切な学びになるよう、職員一同さらに頑張っていきたいと思えます。